



Title	高校教育における「適格者主義」と「支援」を考える : キャリア支援の取組を踏まえて
Author(s)	吉田, 美穂
Citation	「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」 シンポジウム報告書, 54-64
Issue Date	2012-05-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49387
Type	proceedings
Note	C : シンポジウム テーマ : 学校の限界線上における学び 「遊ぶ・学ぶ・働く : 持続可能な発達の支援のために」シンポジウム報告書 : 子ども発達臨床研究センター総合研究企画(2011サステナ企画). 平成23年11月2日(水)~4日(金). 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟 教育学研究院会議室. 札幌市
File Information	Yoshida.pdf



[Instructions for use](#)

「高校教育における『適格者主義』と『支援』を考える

—— キャリア支援の取組を踏まえて」

発表者：吉田 美穂

(神奈川県立田奈高等学校教諭・中央大学兼任講師)

ご紹介にあずかりました吉田美穂です。できるだけ、具体的な生徒の様子、子どもたちの様子が分かるような報告ができたかなというふうに思っています。よろしくお願いいたします。

内容についてですが、私が事前に用意させていただいた資料がお手元にあると思うんですが、このシンポジウムに参加させていただいて、ほかの先生方、昨日の青木先生のお話や今日の乾先生のご報告内容などを伺ったりする中で、構成をかなり変えて、お手元のものとは違うものを入れてお話ししていきますので、前の方を見ていただいて聞いていただければと思います。

まず、神奈川県立田奈高校についてですが、全日制普通科の創立34年目の学校です。神奈川県は、人口増加に合わせて一気に100校ほど高校を増やした時期があるのですが、その中頃につくられた学校です。横浜市の北部にございまして、田園都市線という私鉄沿線、昔ドラマの『金曜日の妻たちへ』が撮られた「たまプラーザ」の近くで、結構、高級住宅地の中の高校なんです。けれども、通ってきている生徒は非常に多様で、全体には高級住宅地には住んでない子どもたちが多くなっています。

進路は非常に多様な状況です。田奈高校は、3年前にはクリエイティブ・スクールという県の位置付けを与えられました。これは神奈川県独自のもので、県内に3校あります。この指定の話が来たとき、管理職も含めて教員集団は、自分たちが今までやってきたことをその枠組みを使って発展させられるだろうと発想で、県と話し合いを重ねて受け入れていきました。一応、県からかぶせられたクリエイティブ・

スクールという冠をいただいた形にはなっていますが、実践そのものは、比較的それ以前からずっと積み上げてきたものがございます。

クリエイティブ・スクールになった段階から非常に特徴的なのが入試です。入試は、学力検査を行っていません。いわゆる調査書を資料にするのですけども、普通、調査書で見るのは5段階の「1～5」という評定の数字だと思いますが、これはクリエイティブ・スクール入試では一切使いません。何を見ているかということ、「関心・意欲・態度」のABCなどを見ているんですね。観点別評価ってありますよね。3段階でABCって付きます。国社数理英5教科については、「関心・意欲・態度」のABCのみを見ます。「知識・理解」などの観点は見ない。あとの実技教科科目はすべての観点のABCを見ますけれども。それから、面接の評価を加えて可否を判定します。これが前期入試です。そして、後期入試があるんですけども、そちらではグループ討論を実施してその評価も加わる形になります。

学力的には全日制の下位に位置する学校で、「うちに来られなかったらもう定時制に行くしかない」というような位置付けになる高校ですから、倍率は結構ありますけれども、高倍率だから、じゃあ、結果として入ってきた入学者の成績が上がっているかというと、そうではない、という入試になっています。

学校としての体制は、各クラス30人。高校は基本的には40人学級ですけども、それをすべて30人で組んで少人数で学習指導に当たります。さらに、英語と数学などは苦手な子どもも多いので、半分に分けた15人のレッスン・クラスにしています。そして、

学校として非常に特徴的なのが、対話を重視した生徒指導と、教育相談の体制を重視していることだと思います。このあたりは後でお話ししたいと思います。

学習が苦手な子供たちが多いので、個別支援・早期支援・段階的支援ということ意識して、さまざまな補習などを行ったりしています。また、地域と連携するコミュニティースクールという形も取っていきまして、いろいろな地域の方々に協力していただき、地域の資源を活用させていただいています。

生徒はすごくいろいろな課題を抱えています。先ほどから他の先生方のお話にも自己肯定感とか自尊心とか出てきていますけれども、やはり自己肯定感は低い生徒がどうしても多くなっています。それから自分の感情をうまくコントロールして、人との関係を円滑につくり上げることが、なかなかできない生徒も多いです。背景には、やはり厳しい経済状況とか、不安定な家族関係がある場合が多いように思われます。現在は、授業料が無償化になりましたのでデータはありませんが、2009年度までは県下でも有数の授業料免除率の高さでした。母子家庭も非常に多いです。これは学校として統計を出しているわけではないんですが、例えば、私が数年前に担任をしたクラスでいいますと、30人中、母子家庭が10人ということで3分の1ぐらいでした。

そして大きな問題は、進路です。様々な支援をして抱えてきた生徒を、今度は私たちが送り出していくということになるんですけども、非常に厳しい雇用経済状況の中で、進路を切り開くことが難しくなっているということがあります。

今回のこのシンポジウムで、どういう角度で本校の取り組みをご紹介していこうかと改めて考えたときに、学校で「学ぶ」ということと「働く」ということをいかにつなげていくかということが、これからの学校の1つのテーマだろうと思いますので、そういう切り口から、少し本校でやっていることをご紹介できるのではないかと思います。あらかじめ用意した皆さんのお手元の資料に入っていない部分もありますが、紹介します。

いわゆるキャリア教育ということで、文科省がインターンシップとか職場体験とかを進めているのは、皆さんよくご存じだと思います。そういう体験

学習については、本校は比較的早い時期からやってきました。1年生全員をわずか1日ですけれども、夏休み中、地域のさまざまな事業所に職場見学体験ということで出しています。事業所の分野は非常に広がっていきまして、ほとんどの生徒が参加します。逆にここで参加できない生徒は、背景にさまざまな課題を抱えていることが多いといえます。この行けなかった生徒については、その後、私たちとしては、職場見学体験に行けなかった背景、本人の状況、家庭の状況、そういったものを見ていく。ある意味ではモニターみたいな役割も果たしているといえます。

参加した生徒については、非常にいろいろな経験をさせていただいています。

(ここから、スライドを見ながら)これは、金属を加工する事業所さんに行って体験をさせていただいているところです。これは、保育園に行って体験させていただいているところですが、実はこの子は、自分が卒園したところに体験に行ったのです。体験学習では、生徒を送り出すと送り出しっぱなしになりがちだといわれますが、本校の取り組みの特徴として、必ず終わった後に事業所さんと会議を持って、意見交換をさせていただいたり情報交換させていただいたり、継続的な関係を持つようにしています。この体験終了後の会議で、保育園の先生がいろいろお話くださって、「保育園のころから気になる子だったんです」「〇〇君をよろしくお願いします」と私たちに頭を下げて、帰って行かれました。そんな風につながりを大切にしながらやっています。

これは、自動車関係のところでも体験をさせていただいているところです。次は、高齢の患者さんが非常に多く入院している病院で、患者さんのお世話を学んでいるところ。そしてこれは、学校の近くに「こどもの国」という施設があるんですけども、動物関係に行きたい生徒がそこで牛の世話を体験しているところです。職場見学体験の後には、必ず生徒にアンケートを取っているんですけども、生徒はこういう体験をととても喜んでます。「楽しかった」「新しく学ぶことがあった」「やりがいがあった」「社会を知る上で参考になった」など、いずれも肯定的な回答がすべて8割以上と非常に高い結果になっています。

アンケートには、いろいろなコメントを書いてもらっているんですけども、非常にいろいろな意味での学びがあるんだなという感じがいたします。「仕事の実際を知る」とか、「甘く見ちゃいけない」とか、「年上の人には必ず敬語で」とか、「あいさつは笑顔」とか、「事前訪問がある場合、そのときに当日の説明をすべてされて当日は説明がない場合があるので、覚えておかないと大変だ」とか。最後の感想は、考えさせられます。課題を抱えがちな生徒と日常的に接していると、私たち教員は、普段の指導では失敗させないように、丁寧に、丁寧に、「これはこうだからね、あれはこうなっているからね」と細かくフォローしてしまっています。それに慣れた生徒が、実際に仕事の現場に行くと、事前訪問した日にあらかじめ説明を受けて、体験当日はすぐに仕事をしなきゃいけないという場面に会って、そのことを書いているわけです。それから「バイトじゃ分からないことがたくさん学べる」という声もあります。事業所と学校の丁寧な情報交換の上で初めて成り立つことなんですけれども、結果として、生徒は非常にいい経験をしているなと思っています。

ここまでは、文科省ご推奨のキャリア教育の、いわゆるモデル報告みたいな話になっちゃったんですけども、ただし、本校の生徒にはそれだけでは全然足りないのですね。本校の生徒は、高校に入ってからかなりアルバイトに入っていきます。これは、家庭の経済状況が厳しいということも当然かかわっています。一般に、多くの学校がアルバイトをどう見ているかという、許可制とか、原則禁止だけど特別な場合は申請して許可とか、そういう学校が今でも多いと思います。本校の場合は届出制で、事実上、届けさえ出せば、いくらバイトをしても基本的にはオーケーという体制にしています。

これは地域性もあると思うんですけども、神奈川県のような人口稠密な地域で、広い範囲から生徒が通ってきている高校では、アルバイトを禁止したとしても、地元などで隠れてやっていけばまず絶対に分かりません。なので「禁止」と言っていると、生徒はやっていることを学校に言わないでおいて、実際にはいろいろなところでアルバイトをするという状況になりますので、フリーにやれる、でもその代わり届けは出して、どんなふうになっているかとい

うことをこちらが分かるというような形にしているのです。

どのぐらいの生徒がアルバイトを経験しているのかというと、1年生の2月の調査で68.8%、2年生では76.1%。だいたい3年になるころまでには、8割以上の生徒がアルバイトをするような状況です。平均3日程度、時給847円、平均月収4.2万円というような感じでやっていますけれども、アルバイトを始めた理由を聞くと、第一に出てくるのは「お金が欲しかった」。当然ですよ。注意してみなくてはならない点としては、「家族から働くように言われた」という生徒が18%ほどいます。この子たちは実際家にもお金を入れていると思われまいます。「働いてみたかった」、あるいは「学校とは違う友人関係が、人間関係が欲しかった」という回答もあります。

バイト先なんですけど、非常に偏ってしまっていて、コンビニ、スーパーの小売り系とか、ファストフードやファミレスなどの飲食店系というのが非常に大きなアルバイト先になっていて、限られた分野でアルバイトしている感じがあります。アルバイト代は何に使っているかですが、学校に納めるお金まで自分で担う生徒も少数ですがいますし、それから昼食というのが3割。要するにお昼代ですけど、学校に持ってくるお昼を買って持ってきていて、それを自分で払っているという子が3割ほどいるんですね。そして、半数以上が携帯電話は自分で払っている。「自分に掛かるお金は、基本、高校生なんだから自分で払う」みたいな感覚で、親もそれは「当然」という感じになっている家庭の状況があるように思われます。さらに、家に入れるというのが、先ほどとほぼ対応関係が想定されますが、18%ほどいます。堅実に貯金している生徒もかなりいます。その中には、「将来の進学、例えば専門学校に行きたい、でも家にはお金がない、だから一生懸命ためるんだ」と言っている子もいます。

こういうアルバイトの状況なんですけれども、後から話すように、アルバイトには非常にプラスの効果もあると思いますが、課題もないわけではなく、「アルバイトをして困ったことはありますか?」と聞くと、3分の2ぐらいの子が「困ったことがある」と答えています。上位3つは「お客さんへの対応」「バイト先の人間関係」「体力的にきつい」。これが不

動の3位なんですけれども、この他に、「シフトを勝手に入れられる」とか、逆に「シフトに入れてもらえない」という悩みも多くあります。今、雇用状況が厳しい中で、アルバイトも争奪戦で、実はバイトしている子の率は、4年ほど前の調査よりは下がっているんですね。どうしてかという、バイトの面接を受けてみたけど落とされる生徒もいるわけです。「また、落とされちゃった」。バイトをやりたくても、やれない。合格しても、今度はシフトの調整で、「使えるやつ」と思われたらたくさん入れてもらえるのかもしれないんですけれども、そうじゃないとなかなかシフトの回数を増やしてもらえなくて、思ったように働けないという実態があるようです。アルバイトは雇用調整に使われているんだということ、しみじみと感じます。

それから、「レジのお金が合わない負担する」というような問題もあります。これは誰がミスしたか分からないんだけど、その日入ったバイトが4人いて、例えば1万円足りなかったら「4人で弁償しろ」というふうに言われて、払っていると。これは労働法的にはおかしい対応なんですけれども、そう言われると仕方がないからそうしているという。コンビニ、ガソリンスタンド、いくつもの事例を聞いています。10人に1人は経験しています。それから、遅刻などで罰金を取られる。これも労働法違反なんですけれども、そういう問題があったりします。あるいは中には、「辞めたい」と言っているのに辞めさせてくれないとか、そういう相談が来たりすることもあります。

こういう生徒の悩みを受けて、彼らは現に働いているわけですから、働いているという現実を踏まえた上で、彼らに有効なサポートをしていかないといけないだろう。将来を考えると、実は、卒業後もアルバイトで生きていかなきゃいけない子はたくさんいるんですね。何かあっても「学生のアルバイトなんだからいいじゃん!」と、流しておけるような問題ではもうないと考えています。

そういう意味では、高校生なんですけれども、彼らは立派な労働者であって、卒業後も非正規が続いてしまうというような、かなり多いパターンを考えると、非正規雇用への移行は、高校時代からすでに始まっているとっていいような状況が見えます。

こうした事態を踏まえて、私は、政治経済などの授業で、簡単なクイズ形式でアルバイトの権利について学ぶ教材をつくるなど、労働法教育に取り組むようになりました。現在は、学校全体として、2年生の総合的な学習の時間に、すべての生徒に労働法の内容を取り入れてやってきています。

生徒はやっぱり、自分の状況とつながると、「ええっ? 自分の時給って最低賃金よりも低い!」とか、すごい反応が返ってきます。自分の働いている現実ですから、それはすごく反応しますよね。

その子にとって必要な支援や教育内容というのがあったとしても、こちらがいくら「よかれ」と思っても、いつでも受け取ってもらえるというものではないですよね。本当にそうだと思うんですけれども、現にバイトをしていて、「何か変だな」とか、「困ったな」とか、「時給が安いけどしょうがないのかな」とか彼らが思っているところに、ダイレクトに響く教材という意味では、非常に重要な学びになっているかなと思っています。

このような労働法教育も含めてキャリア教育だと田奈高校では考えているんですけれども、田奈高校の今までキャリア教育について改めて考えると、3つの視点があるかなというふうに、私としては整理をしています。1つは「地域・体験」。やっぱり地域の方々とつながったところで体験をさせていただく。その中で仕事について考えていく。地域の事業所での体験というのは単に体験ではなくて、その事業所の大人の方から大切に丁寧に扱っていただいたり、親身に相談に乗っていただいたりということ、周りの大人への信頼を育てることにつながります。そして、ちょっと褒められたりすると、「ああ、じゃあ、このことはできるんだ」という自分への自信、そういうのにつながるかなというふうに考えています。それから、先ほどからお話しているアルバイトは、それ自体の効果はいろいろあるんですけど、体験先は限られていますので、そういう意味では、多様な職場でのいろいろな経験ができる場というのは、やっぱり別で用意していく必要があるかなと思っています。

それからリスク回避ということも非常に重要なポイントです。

一時期フリーターが問題だということで大騒ぎさ

れた時期に、「とにかくフリーターになるな」と。いろいろな先生が、「フリーターになってはいけない」教育というのを展開した時期があるんですけども、その後の流れの中で、フリーターというのはやはり雇用側の問題であって、高校生の意識よりも、はるかに客観的な雇用情勢が大きいんだということがだんだん分かってきて、さすがに最近はそういう雰囲気も減ってきたと思うんですけども。

とにかくフリーターになっていかざるを得ない状況があるなら、そうではなくて、なってしまうても何とかやっていけるように、自分自身を守る知識なども身に付けていく。労働法教育だとか。それから、「いざ困ったというときに、相談できるんだ」という感覚。「相談すれば、応えてくれる場所がある」「応えてくれるお人がいる」「相談できるんだ」というようなそういう構えというか感覚というか、それを子どもたちの中に養っていくということも大事だと思っています。

そしてベースには、実は子どもたち自身の、アルバイトもそうですけれども、生活というのがある。学校に来ている以外の時間の、彼らの生活というところも見ていかないと、彼らの将来を切り拓いていくということはなかなか難しいなと考えています。生活の基本、これは実は、すごく課題がたくさんある子が多くて、食事の話、睡眠の話、ストレスマネジメントの話、デートDVの話、こういうものも全部、キャリア教育の一環だと考えています。そういうものも織り込みながら、年3回の三者面談なんかも併せながら、田奈高校ではプログラムを展開しています。

とはいえ、ここからもまた厳しいお話で、本当に進路状況は厳しいです。これはこの3月に卒業した生徒204名の進路先です。大学から専門学校まで合わせまして101名、つまり204名中、約半数近い生徒が進学をしました。進学するかしないかは成績が分岐点ではありません。親がお金を出せるかどうか、これが分かれ目です。成績ではありません。もちろん本人の希望で、これ以上机に座っての勉強は嫌だとかと言う生徒もいるので、本人の希望も関係ありますが、圧倒的には経済的なところですよ。

残りの103名のうち、いわゆる正規的就職をしたのは何人かという、わずか30名だったんですね。

公務員というのは自衛隊です。それと一般の民間の就職29を合わせて30名ということです。「進学準備」というのは、「専門学校へ行きたいんだけどお金がないから行けない、だからバイトしてお金をためるから」と言って出ていきましたというような子ですね、そういう子が10人。それから「就職準備」。これは就職活動をしましたが、残念ながら内定を得られないまま、これからも就職活動をしますと言って卒業していった生徒で、33人。「未定その他」は、そういうこともうまくできないまま、「何とか卒業するんだ」というところを目標に、ぎりぎり、「ああ単位が取れた、卒業」みたいな人とかも入れて、その他30人という数になっています。

この背景にはやはり、社会全体の経済的要因があります。実は、この進学準備から未定その他まで、全部合わせた未定率というのは、キャリア教育を始めて一生涯やってきて、ある時期からずーっと下がってきていたんですね、学校の中では。ところが、リーマンショック以降、バーンと上がりまして、理由ははっきりしていて、求人件数の激減です。2007年には880の求人票が来ていましたけど、2010年には322まで減りました。そして例えば1枚の求人票で「10人採りますよ」って書いてあるのが、「5人採りますよ」になっていたりとかいうことも含めると、この数よりももっと減っているというのが実感です。

かつて高卒が入っていていた職場は、本当に高校に求人票を出さなくなっています。大卒とか専門学校卒に取られてしまう。だから来る中身というのが、例えば事務なんてほとんどないです。男子だったら製造とかの技能、女子だったらウエイトレスとか、そういうところに決まっていくケースが非常に多いということが言えると思います。

そういう中で、でもとにかく先ほど見たように、「お金がないから進学できない。だけど就職がない。どうするんだ?」ということになって、キャリア教育だけやっても、子どもたちの「学ぶこと」から「働くこと」への移行につなげていけないということで、進路が決まらないまま卒業していく卒業生や、あるいはうちの場合、中退生も何だか学校が結構大好きでして、中退後も明るくたびたび学校に現れるので、そういう中退生も含めて何とか支援して

いきたいな、という流れができました。その背景には、彼らにとっての学校の意味というのがあると思います。学校は、卒業生や中退生にとって、ある意味で非常に居心地がよい場所だったのだと思います。信頼できる先生もたぶんいるんだと思います、現れるんですから。困ったとき彼らは学校には来ているわけです。じゃあ、彼らが公的な、例えば労働相談機関の窓口だとか、就労機関の窓口に行くだろうかって考えると、「うーん、あんまり行けないだろうね」って、「行かないだろうね」というふうに私たちは感覚として思うわけですね。

それなら、学校に窓口を置いて、学校に来たそういう卒業生、中退生に対して、就労支援をはじめとしたいろいろな相談に応じていけるんじゃないかなというのが、昨年度から形を作り始めて、今年度から実質的に動かしている「キャリア支援センター」という取り組みになっています。(組織図を示しながら) ちょっと字が小さくて見えにくいと思うんですけども、基本的には、センター長が副校長、それから事務局長と事務局担当に教員が各1名、あとは就業支援員の方々とか、サポステの方々とか、そういう方たちと一緒に運営をしています。

私はこの中では、キャリア支援センター事務局担当というのに当たるんですけども、キャリア支援センターの中で在校生の支援の部分を担当しています。キャリア支援センターは今までお話したようなキャリア教育のプログラムも含めて在校生の支援を1つの柱としていて、もう1つの柱が、卒業生、中退生の支援ということになっています。

具体的にどんなふうに展開しているかということ、週1回「よこはま若者サポートステーション」の分室「生活・しごと∞わかもの相談室」の方から、2名のスタッフに来校していただいています、火曜日の午後に、図書館を拠点に、生徒と自然に交流しながらいろいろな会話を交わす中で、相談に応じていただいています。そして、予約が入ると、午後の1コマとか2コマをその子の相談に当てる。また、担任の方から「ちょっとこの子は厳しい状況にあって、福祉的な支援も含めて進路のことを検討したい」というようなケースが入って、個別面談を入れる場合もあります。これらの相談は、「田奈 PASS」という名前です。

それから、就職支援員、キャリアコンサルタントの方々も入っていただいています、1週間全曜日相談が可能なようにしています。そして具体的なプログラムとしては、下の2つを今動かしています。

ひとつは、保育士プログラムというのをこの夏から動かしています。保育士というのは、本校に来る生徒たちには非常に希望する者の多い、あこがれの職業です。保育士になるためには、専門学校あるいは短大に2年間行って勉強して、国家資格を取るのが一般的です。ところがその費用が出せない生徒が多いわけです。そうすると、「自分の夢が実現しない」「何で高校に来ているのかな?」「やる気もない」みたいな感じになりがちです。やっぱり希望がないと人間は頑張れないというところがあって、何となく宙ぶらりんのまま過ぎてしまうというような生徒の姿もたまに見かけます。

実は、保育士の国家試験の受験資格には、認定保育園などで2年間以上、2,880時間以上の勤務というのが入っています。つまり専門学校に行かなくても、もちろん国家試験は受けなきゃいけないんですけども、受験するための実務経験を満みたせば受験資格が生じるんですね。ただ、さっきのアルバイトの調査の結果を見ていただいてもわかるように、認定保育園のようなところに簡単にアルバイトが決まるかということ、非常に難しいわけです。そこで横浜市の青少年育成課の方とご相談しまして、横浜市のご協力で、横浜市の持っている認定保育園で生徒のアルバイトを受け入れる取り決めをしていただきました。

3年生の夏に、希望者は1週間ぐらい保育園に実際に入って研修をします。これで適性を見ます。あこがれていたけど、やっぱり思ったよりも全然大変で「こんなできないな」と思ったら、そこでやめればいいわけですね。あるいは、園の方も、「この子ならある程度できるだろう、大丈夫」という判断ができます。その辺はお見合いのようなものですけども、それをまず経まして、それでいいだろうということになった生徒は、卒業後2年間程度ですね、最低2年間、アルバイトで認定保育園に入って受験資格を得られるようにしていこうと。

今年これで最終的に2名の生徒が、実際このプログラムに乗って卒業後4月からアルバイトに入る予

定です。その内1名は学校生活も劇的に変わって、すごく一生懸命学校生活にも参加するようになって、希望があるって大事なことなんだなということを手ごく思いました。

それから、介護職のプログラムも動かしています。これも横浜市と専門学校、その関連介護施設の協力で成り立っています。介護職というのは、これは非常に現実的な進路です。昨日の青木先生のお話でも、アルバイトで介護施設に入って、そこから職に就いていった青年のお話なんていうのがよく出てきたと思うんですけども、確かに今一番入りやすい職場です。そういう意味で、今年も普通に正規の就職で行く生徒も多いです。

ただし、やっぱり介護職というのは、非常に重労働の側面がありますし、対人援助職という難しさ、それなりの大変さというのがあると思うんですね。わずか1日の職場見学体験で介護施設に行った1年生なんかも、「何が大変って老人の人たちとお話を続けるのが、あんなに疲れて大変なことだとは思わなかった」と言って帰ってくる生徒もいます。逆にそういうのが心配だなと思った子が、そういうところはすごくうまくやって、「おじいちゃん、おばあちゃんといるとほっとする」なんて言って帰ってくる子もいて、適性というのもすごくあると思うんですね。

そういう意味で、マッチングというのも非常に重要な点というふうに思っていますので、このプログラムは3年生の夏に数日、無償で、専門学校にまず研修をしてもらい、その上で、専門学校の関連介護施設の方で、秋から土日に「非常勤」のような形で雇っていただいて、それがきちんと勤まって、「ああ、この子は大丈夫だな」、あるいは本人も「ここでずっと働きたいな」という状況になったら、その施設もしくは同じ経営の別の施設などで、正規採用していただける可能性があるという形でのプログラムを作っていただいています。現在は3名の生徒がこれで実習を経験しています。

今のふたつは、いずれも福祉系の、資格が関係する職だったんですけども、民間の企業でもアルバイトと研修をつないだプログラムができないかということで、「バイターン」というプログラムを始めていこうと、現在準備を進めています。要は、アルバイトをしながら、正規採用に必ずしもこだわらず、

多様な企業にアルバイトとして受け入れていただいて、かつ、企業にはちゃんと謝礼をある程度お支払いして受け入れていただく。生徒はアルバイトとしてちゃんとお給料をもらうわけですけど、事業所さんには、未熟な生徒を受け入れていただくわけですから、「研修としての意味合いがあります、よろしく願います」ということで、謝礼をお支払いして受け入れていただくという考え方です。

これは、本当に高校だけではとてもできないような内容ですので、現在、神奈川県が募集している「新しい公共」事業に、NPOや企業と協議体を作って応募しています。「新しい公共支援事業」は内閣府が管轄ですね。一緒に協議体をつくっているのは、NPO法人ユースポート横浜、これは「よこはま若者サポートステーション」の受託団体です。それから株式会社パソナ、人材派遣の会社ですね。それから株式会社シェアするココロ、社会的企業で、「生活・しごと∞わかもの相談室」の構成員になっている団体です。それに、横浜市青少年育成課、そして田奈高校という形で、5者が協議体となって、このバイターン・プログラムを、高校生の進路開拓としてやりますということで、「新しい公共」事業に現在申請中ということです。来週プレゼンがあるので、うちの校長が頑張ると思うんですけども。そういうような形で、民間の会社でも、アルバイトで入って研修できるという形で開拓をしていきたいと考えています。働きながら学びながら考えていくというようなイメージを、私たちは持っているんですね。

アルバイト経験のもつキャリア発達の効果ということなんですけれども、一般には、旧来の価値観でいくと、高校生はできれば学業に専念することが望ましい、これが今でもやっぱりスタンダードじゃないかと思います。また、フリーター問題でワーって問題になったころには、小杉礼子先生などが、調査に基づいて「アルバイトはフリーター促進要因だ」と、「アルバイト経験した子はフリーターになりやすい」というような調査結果を挙げられたこともあって、アルバイトは決して高校の中で、プラスの価値を持ったものとしてなかなか見られていません。

しかし、実際、どうなのでしょう。田奈高校で、9月16日解禁で高卒の就職が始まったんですけど、9月中に内定が出た子、出なかった子を見ると、試

験を受けに行って結果が出た子が57名いるんですけども、内定を得た25名のうち、アルバイトを経験したことがない子はわずか1名だけでした。逆に、内定が出なかった22名のうち、半分はアルバイト経験がありませんでした。もう歴然と違ったんですね。びっくりするほど違いました。

やっぱりいろいろな人と話をするような経験だとか、自分に対する自信だとか、いろいろなことが、たぶん違ってきているんだと思うのです。このデータは9月末段階で切ったものですから、これからもうちょっと詳細な分析をしていかなければいけないんですけども、私たちがたぶんそうだろうなと事前に予想した通り。というか逆に、あまりにもその通りだったのでびっくりしたんですけども。

やっぱりアルバイト経験というのは、生活の中で初めて働いて初めてお金をもらう経験で、そこでいろいろなことを学んだり考えたり、あるいは時に傷ついたりしているわけで、その部分をなかったこととして、あるいは、できればない方がいいものとして排除して高校生のキャリア発達を考えるというのは、非常にバランスを欠いたことではないかと考えています。

ただ、もちろんアルバイトにも問題がないわけではない。だからそこは、いろいろな、例えば労働法違反のケースとかは相談を受けていきたいと思うし、逆に「そこから何を学んだのか、そこで何を考えたのか、それを自分で語れるようになろう、そうすると就職にいいかもね」というような指導もしていきたいなと思っています。そういうふうな学校の外で彼らが経験したアルバイトを、学校での学び、あるいは学校から次の段階への生きる形にしていきたいなと考えています。

田奈高校でやっていることはどの学校でもできるかということなんですけど、どの学校でも簡単にできるというふうには私は実は思っていない。1つの条件は、田奈高校はわりとスタッフが充実しているんですね。それは非常に重要なことで、学力が低い学校にやっぱり大変な生徒が集まっている、フォローが必要な、支援が必要な生徒が集まっているので、そこでちゃんとフォローしていくということを考えたときには、ぜひそこに人的なものも含めて資源をたくさん入れていただきたいというのが条件

の1つ目です。

2つ目は、田奈高校のいろいろな取り組みの根底にあるものは何かということに関わってくることです。最後に少し、「支援」という話をして終わりにしたいと思うんですけども。田奈高校のような取り組みを進めていくためには、条件として「支援を中心にした学校組織文化」をつくっていかないと、難しいだろうということなんです。それを意識的につくっていかないと、とくに高校では、なかなか支援は進まないだろうと思います。

田奈高校では、先ほど申し上げましたように、対話を中心にそういった生徒指導をしています。「どうしたの？」ってまず聞くことから生徒指導が始まっていているんです。例えば、廊下に生徒がうろうろ出てきている。いきなり、「お前、何やっているんだ、早く入れ！」じゃなくて、「どうしたの？」って聞くところから対応するような取り組みをしていますし、気になる子どもの把握というのを教育相談コーディネーターなどが中心になって進めて、日常的にも職員室で、「あの子は今日機嫌が悪いね、何かあったかな？」とか、そういう感じで、普通に雑談を通してものすごい量の情報交換を、生徒についてしています。いろいろな生徒についての視点というのはその中から出てきて、「ああ、そういう側面もあるのか」と気づく、そういうふうなことを日常的にしています。

「かながわの支援教育」、これはインターネットで見ただけであれば詳しく出てくると思うんですけど、神奈川県として「支援教育」という考え方で、取り組んでいます。田奈高校はある意味で、その先進校の1つだというふうに思っているんですけども、一人一人が抱える課題に合わせて、生徒のニーズに合わせて、支援をしていこうと考えています。

こういう取り組みをしていく中で、学校は大きく変わってきました。中退率は、(グラフを示しながら)平成17年の9.5%がピークの年で、そこから大きく下がってきます。私が田奈高校に着任したのがこの年で、来たときの状況のすさまじさにやっていけるだろうかと、顔色が本当に真っ青になるぐらいのつらい時期があったんですけども、職場見学体験の取り組みが始まったのが、その翌年、平成18年ですね。そこからどんどん、どんどん下がってきて、平

成22年は3%を切っているという状況になっています。このように、ある程度支援ということの効果が出てきているかなと思っています。

こういうことをするためには、やっぱり高校の中の適格者主義というのは、超えていかなきゃいけないんだというふうに私は思います。高校というのが小中と決定的に違うのは、試験があって入学させている、選んで、適格性のある者を合格させている、という感覚が高校の先生にあるという点です。結果として定員内不合格ということも行われている。実は公立高校は税金でつくられているのに、定員が200名いても、受験生が190名しかいなかったら全員入れればいいのに入れないんですね。入れない都道府県がいっぱいあります。北海道はどうでしょうか。分からないですけど。

たとえ定員内であっても、受験生を落とす、うちの学校の基準に達していないから、「さようなら」。また、入ってきた生徒についても、「ある程度の数の生徒にお引き取りいただくのは当然だ」という文化も、課題集中校の先生方の中にはやっぱりあると思います。そうすることによって、一定の層を問題なくやめさせて秩序ある学校空間を守る。これは必要な教員のスキルだというぐらいに思っている学校の先生というのは、実はかなりいます。外では絶対大きな声では言わないことです。

その背景には、地域からのプレッシャーみたいなものもあって、そうしないと周りから苦情電話がどんだんかかってくるということもあります。例えば、妊娠した女子生徒をどうするか。「そのまま学校に通わせるのは問題じゃないか。高校が地域から悪く言われる。」「自主退学しなさい」みたいな。そういうふうなことは今だってたくさんあるわけです。

やっぱり、この適格性のある者だけが高校で学んでいいのだという大きな流れの中で、いくら支援だ、支援だと言っても、なかなかそれは定着しない。だから、高校の教員集団が持っている適格者主義というものをきちんと見つめて、「高校の役割って社会の中で何なんだろう？」ということ、きちんともう一度問い直していかないと、高校での支援というのはなかなか根付かないんじゃないかなと思います。ということで、非常に長くなってしまって申し訳ありませんでしたけれども、私の報告を終わらせてい

いただきます。どうもありがとうございました。

質疑応答部分

(質問1) 1点目は、40人定員のところ30人以下の学生集団ということで、学校の中で加配的措置が取られていてそうなっているのか、それとも「みんなで担任を持ちましょう」という学校体制の中でそういうふうになっているのか？ 2点目は、2年生の総合でキャリア教育を実践されている点について。プランニングはキャリア支援センターでやり、それに基づき、担任あるいはスタッフがやっている、そのやり方について。

(質問2) 適格者主義を超える学校文化というものを、どのように作り上げていったのか？

(質問3) 「適格者主義」について。高校が定員200人募集しても、全員入らない、190人で切る、190人しか埋めないという話。今、小学校、中学校は義務教育だが、高校も義務教育にした方がいいのではないか。高校は定員200人どうしても切らなきゃならないのか。

(吉田) まず第1点、加配の問題ですね。私がすっ飛ばしたところが、実はそのことを説明する部分だったんですが、現在、教員定数つまり法律で定められている定数に加えて、プラス8名の加配があります。これは、もちろん、自動的に保証されたものではなくて、学校が一生懸命取り組んで実績を上げていったと同時に、管理職が頑張っ、県教育委員会と交渉して交渉して取ってきている数字ということですね。

逆に言うと、校長は、それを頑張っ教育委員会に対して働き掛けて、また外の資源もいろいろ引っ張ってくる中で、「外側は俺が頑張っ守るから、お前たち、頑張っくれや」という姿勢を見せる。教員も、それに対して「じゃあ、頑張ろうかな」みたいな雰囲気があると思います。その辺のいい関係が、学校の中でいかに協力していい雰囲気をつくるか、生徒をみんなで支えていこうという雰囲気をつくれるかということに関わっていると思います。これは非常に重要な課題で、そういう意味で、管理職が頑張っ学校の現状や取り組みを訴えて加配を取ってきたというのは、本校を支える非常に大きな条件で

あったと思っています。

それからキャリア教育の進め方ですね。本校の場合は、もともと総合的な学習の時間が導入された2003年から、キャリア教育が総合的な学習の中に入ってきました。その当初は、教材は、総合学科の「産業社会と人間」を参考にして、一部は教科内容の寄せ集め的な要素もあったようですが、カリキュラムを作り、担当者は各教科から出て担当者会議をつくって運営していました。その後は校内分掌等の再編などがあって、紆余曲折があるんですが、現在はキャリア支援グループという校内分掌がキャリア教育の教材や、年間の総合的な学習の時間の運営を担うようになっていきます。授業そのものは学年の先生を中心をお願いして担当してもらっています。教材は、2003年からずっと取り組んできた教材を蓄積し、時に差し替えたりしながら、冊子化したオリジナルテキストを1年生分については持っています。2年生分も、来年度は用意します。その教材に従って、各学年の生徒をよく知っている先生が、各クラスのどこかを担当して教える。キャリア教育の知識・スキルの部分は、キャリア支援グループという校内分掌で蓄積して、学年の先生方がそれに基づいて頑張っているという形になります。

それから、適格者主義を超える方法、これは本当に一番難しいことですが、次の義務教育化みたいな話も関係あるかなと思うんですけども、ここまで高校進学が広がって、高校を卒業していないことが、非常に社会的に大きな不利益につながっていくような時代の中で、確かに義務教育化というのは非常に重要な検討すべきテーマになるだろうと思います。そうすると適格者を選ぶような発想も、そこから減っていく可能性もあります。

そして、義務教育化となれば、「じゃあ、高校教育や中身はどうか？」という話になると思うんですね。100%の子が行くことになったときに、「その子たちの発達や適性、将来の進路に合ったような教育を提供できる、そういう内容が高校側にありますか？」という話になってくる。今度はそこが問われてくるだろうと思います。今の高校教育というのは、進学率が半数以下だった時代の高校教育と本当に変わらないことをやっていて、九十数パーセントの人を収容するということになっている。そのことの難しさ

というのは、やはり非常にあるだろうなと私は感じています。ただ、今の制度のもとでも、ぜひ定員内不合格だけはやらないでいただきたいというのが、私としてはお願いしたいことです。先ほど言いましたが、定員内不合格はどここの県でも起きているわけではありません。「県としてはしません」というふうに宣言している県があって、神奈川県はしていません。200人の定員があって、190人受けてきたら全員が合格です、たとえ0点でも。税金でつくられている教育の場に、希望したら定員内であれば入ると。それは大事なことだと思います。

適格者主義をどう超えるかということなんですけれども、これは私もスーパーな回答、どこでも当てはまる回答を持っているわけではないんです。ただ、田奈高校がなぜできたかということかというと、「あるべき高校生像」から始まるのではなくて、「目の前の生徒の一人一人の現実」から始まるということ、そこに視点を置くということがまず第一歩なんだろうと思うんですね。

「この子の課題は何だろう」、「この子の生活はどうなっているんだろう」、「今こんな問題行動が起こっちゃっていて、その後ろに何があるのかな」、「どこを揺さぶればこの子を助けられるかな」というふうになるためには、先に正しい高校生像とか、うちの高校生はこうあってほしいというのを描くことよりも、まずはその子を見る必要があるではないでしょうか。だから、よく私は、学校の教育計画みたいなとか、教育方針とか示しますよね、望ましい、「こういう高校生を育てます」みたいな、ああいうのじゃない方がいいのにな、といつも思います。目の前の生徒から始めてほしいなと。

うちの場合はたまたまそこが、わりとそういうセンスが強い人、目の前の生徒から始めようというセンスがある人が比較的多かった時期に、それを支援するような管理職の動き、教育相談の組織的な導入があった。これは非常にうちの場合には大きな意味があったと思います。教育相談がシステムを作って、いろいろな校内のほかの人たちと情報交換しながら一人一人の生徒を支えるという、その仕組みづくりができたところが、田奈高校の場合には支援の成功に結びついていったと思っています。

(意見1) 田奈高校でつくっている学校というのは、僕がイメージしているこういうのと似ている。就労体験というのは、重要な経験の中の核にする必要がある。バイトの話というのはまさにそう。アルバイトをもう少し教育的に使うというのができないだろうか。学校の外と中の境界線上の「いかがわしい空間」。

(司会) 最後に一言ずつおしゃべりいただきますので、そこに含めていただければ。じゃあ、短いことを1つ。

(意見2) 高校生は言ってみれば低賃金労働者。だから社会の接点というのは、目の前の子どもの中にある。「その場は子供に応じてつくるという考え方がいいんじゃないか」という吉田先生の考えから学んだ。

(司会) 1人ずつ、最後のまとめなり、ご感想なりを。

(吉田) ありがとうございます。私自身も質問していただいたりして、多くを学ばせていただきました。やはり最後に出てきました社会との接点を、「目の前の子どもから見つけていく」という、そういう見方ですね。それは本当に大切なことだと思っています。私は社会科の教員なんですけれども、アルバイトをしている生徒の現実からものすごくたくさんものを学ばせてもらったし、そこから授業ができるというふうに感じています。

そういうことはとても大切だなということと、それから評価ということを最後の方はおっしゃいましたが、確かに学力以外のものが就職のときなどに大きくかかわってきます。ただ、うちの生徒は、ペーパー試験が入っている就職試験を受けに行くと軒並みに落ちるんですけれども、そういう試験が入っていないところでは、学校の調査書とも違って、企業の方はいろいろな視点から見て生徒を採ってくださることもたくさんあります。

どうしても教師は学校の中だけでいるので、評価の視点が学校的になりやすいですね。バイトンなどの取り組みは、生徒が、会社や地域など学校とは異なる評価に出会う場でもあります。田奈高校の取り組みは、学校が、学校以外の多元的な価値と出会う場を意図的につくり、学校教育に取り入れている

というところにおもしろさがあるのかもしれませんが。学校的な評価の視点にともすれば偏りがちな教員の傾向を、私たち自身も常に自覚しながら、生徒をいろいろなまなざしで見られるように、日々考えていかなきゃいけないかなと思います。どうもありがとうございました。